

忙しすぎる研究者

岡崎国立共同研究機構長

竹内 郁夫

Ikuo Takeuchi,
President, Okazaki National
Research Institutes



昨年末に懸案の科学技術基本法が国会で全会一致で採択され、本年6月にはそれに基づく科学技術基本計画が閣議決定された。このような状況の中で橋本首相が本年初頭の施政方針演説で“科学技術創造立国”というキャッチフレーズを使って、科学技術の振興を謳った。これらは、永年にわたって軽視され続けてきた我が国の基礎研究、とくに大学における研究の推進に不可欠な社会的基盤の整備に今後大いに役立つことが期待される。事実、今年度から各省庁で始まった投資的経費による研究推進事業は、政府資金による研究の推進を未来社会に対する先行投資であるとする考えに基づいている。この事業に限らず、今後いろいろな資金が導入されることによって、先進諸国に比べて見劣りする状況に置かれている我が国の大学の教育・研究条件の改善が速やかに進行することを期待したい。

一方、大学や研究機関に十分な資金が供給され、研究の推進に不可欠な研究費の不足や研究設備・施設の不備が解消されれば、研究推進のための社会的基盤は十分に整備されたと言えるのであろうか。答えは勿論否である。すなわち、研究の進展には研究費や研究設備といった物理的要因のみならず、いくつかの社会的要因が深く係わっている。ここではその一つだけを取り上げてみたいと思う。

結論から先に言えば、研究者は忙しすぎるのである。数年前に私が所属しているある学会で会員にアンケートをとったことがある。多くの会員が研究を阻害する要因として時間の不足を挙げていた。時間が不足する原因として挙げられていたのは“雑用”と会議の多さである。雑用とは一般的に言えば、本人（研究者）でなくてもできる用事のことである。小はコピーをとることから始まって、提出を要求されている書類を作ったり、集会の準備や学会の用事等々、文字通り研究に直接関係しない種々雑多な用事である。私は企業の研

究所はよく知らないが、大学においてはこれが大きな問題である。

大きな問題になってきた背景には、近年雑用が増え続けていること、および研究支援者の数が少なく、しかもそれが定員削減によってさらに減少してしまったことが挙げられる。大学における研究支援者の数が欧米に比べて極端に少ないことは、科学技術基本計画でも指摘され、その改善が求められている。今から40年ほど前、私がアメリカで、ポスト・ドクをしていた僅か50人ばかりの小さい（しかし高名な）研究所においてさえ、各種の技術をマスターした高度な技術者が研究者の研究を支援するシステムがあった。

研究者を忙しくさせているもう一つの要因は会議の多さである。これも大学だけの特徴であるかも知れないが、余りにも会議が多すぎる。会議は増えることはあっても、減ることはないというのが、私の率直な印象である。欧米でも会議はあるが、日本ではそれが異常に多いと思われる。これは何事につけてもコンセンサスを重視する日本の特徴ではなかろうか。このことはまた、皆が決めたのだから、誰にも責任はないという無責任体制に連なっているのではないかと思う。

いずれにせよ、研究者の時間は貴重である。特に、真似事ではない真に新しい物を作り上げるためには、独りで考えるための十分な時間と余裕が必要である。日本の経済的発展に裏打ちされる形で、我が国から発表される学術研究論文数は着実に増加してきた。また、論文が掲載される学術研究雑誌のレベルも年毎に上がっているように見える。しかし一方、論文数は増えたが、本当にユニークな研究はそれ程増えていないのではないかという危惧も聞かれる。私はそれが研究者が忙しすぎること、すなわちゆっくり考える時間の少なさと関係しているとすれば、事態は深刻であると思う。